

見るとひとしく地に平伏す、持資衣紋ひきつくるひ打過たりければ、唯人に非すと、大に驚れたるとなり、

〔土佐軍記〕下土佐寄船事

慶長元年九月八日、元親公居城長家ノ森種崎ノ麓、葛木濱浦戸ノ湊へ、夥敷唐船ヨリ來ル、元親公軍兵ヲツカハシ、此船ヲ湊へ引ヨスル、是ハ南蠻ノ内延須蠻ト云國へ通船也。○中略右ノ趣ヲ元親公ヨリ秀吉卿へ言上アリ、時ヲ不移、増田右衛門尉ヲ遣シ、船中ヲ改ルニ。○中略

一生タル猿七疋

面白ク、毛ハ黒ク、尾ハ長ク、鼠ノ尾ノ如シ、

〔武隱叢話〕老人の物語に、我其昔藝州廣島に在し時、福島伊豫守屋舖書院の雪隠に化物在。○中略夜

半前團右衛門○廁へ行、亭主心得て小姓に手燭持せて供に遣す、團右衛門何心なく、手燭請取、廁へ行用達し、廁の上に二抱程の大松に葛はひ茂りたる有、稍は十二三間高し、其梢より何とも去らず、葛の葉鳴さわぎ、物の傳下音して、廁の屋根へ飛下事、其音大男などの足音なり、團右衛門吃と驚思に、内々世に云ならはす、化物ならんと思ひ居たる處に、廁の屋根より内を差のぞき、其顔朱を塗たるがごとく、眼の光り鏡のごとく、牙を嚙出し、さながら鬼面に似たり、團右衛門少も騒がず、はたと睨返す、件の化物面を引込て、不見、其儘廁の下より毛の生たる手にて、團右衛門が尻を撫る、心得たりとて、とらへんとするに、手を引又、屋根よりのぞく、又睨たれば、其儘腕をとらへて、内へ引込、廁の戸破れ、何とはまらず、内へ引込て、團右衛門得たりやあふと引組、上を下へと返す、手燭も踏消、組合書院の椽に残たる十五六歳の小姓、椽より飛下り走り行、其音居間へ聞るに、付、皆々手燭を持走著、小姓は、化物の足をとらへ居たり、團右衛門は血に染り、化物を脇差にて刺通たるを見たれば、大成猿なり、

〔續撰清正記〕七清正家中江申出さる、七箇條○中略